

【子どもの観察例:ジェマ】(女児 1971年6月25日生;3歳11ヶ月より14ヶ月間の記録)

・1975/05/22・・・ジェマの母親が当番で来ていた。ジェマは一見して他の子どもらと母親を共有することにはとても鷹揚に構えているふうに見受けられた。たとえば、母親は幾人かの子どもらに本の読み聞かせをしていた。子どもらはジェマの母親の周りに群がって、どの子どもとも熱心にお話を聞いている。ジェマも嬉しそうに、お話を楽しんでいるふうであった。ところが、そのしばらく後、遊びも終わり頃になったとき、すべての子どもらが外に出てしまっていたのに、ジェマは一人室内に残っていた。台所ではジェマの母親が後片付けに忙しくしている。その台所に近い廊下の辺りで、おもちゃの自動車に乗り、足を地に付け、前後にブラブラ行ったり来たりしながら、惨めで悲しげな顔をしている。外に出て他の子らの遊びに加わりたくない様子で、むしろ母親の側から離れたくないといった感じで、所在無げにグズグズしている。この気鬱は何だろう。お母さんをやはり独り占めしたかったのかな？

・1975/10/10・・・ジェマそして仲良しのサイモンが2人だけで‘隠れ家’にいた。[この2人は同年齢である。]その「スライド・ハウス」の中には毛布やらシーツなどが運び込まれ、万事万端整えたようである。そこで眠るとやら、食事をするとやら・・・2人は「ママとパパ」になっているはず。だが、ジェマはなぜかお茶のカップを口に咥えていた。妙に赤ちゃんっぽい。ママでもないとしたら、彼女は何になってたつもりかな？[意識下でのうごめきが、時折ジェマの茫漠とした意識の隙間からひょいと頭を擡げる！]

ミルクサークルの時間中、ジェマは指しゃぶりをする。

・1975/10/24・・・ジェマはいつものようにサイモンと一緒に、2人だけでウエンディ・ハウスにいた。そこであったけのお人形さんをベッドに並べて寝かしつけてる。それらは彼らの‘赤ちゃん’というわけだ。それからふいと彼女を観察してる私のまなざしに気づいて、ジェマはフッフッと含み笑いをし、私に背中を向けた。なにやら顔には恥ずかしそうな笑みが浮かんでいた。何を見られなくなかったのかな？

ジェマは絵の具を使ってお絵描きをしていた。とても力強いタッチである。その画用紙に自分の名前を入れた。それからくわたし、描き終えたわよ>と言う。乾かすために部屋の隅へともってゆく。[彼女は物事の段取りをつけるのがうまい。彼女の物腰にはとても自立的なふうがある。だがその一方、彼女は私には自分のほうからほとんど接触をしてこない。どこか私の注意からスルッと逃げてしまう感じだ。大人との対決(!)を避けんとしているかのようだ。だから、滅多に捉まらない。おそらくジェマの自意識の強さに私もつい遠慮がちになるのだろう。彼女は私の観察の対象から外れてしまう印象がある。]

ミルクサークルの時間、新参者であるアニヤという女の子が落ち着かない。スカートの裾を持ち上げ、彼女のお臍が丸見えとなる。それからパンツを上げ下げする。両脚を大きく拡げて、性器を椅子の角に押し付け、擦り始めた。まったくそれに気を奪われている。周囲がまるで見えていないようだ。傍らのマシューはそれに好奇心をそそられずにはいられなかった。彼女の‘下半身’をじっと凝視している。そし

て間もなく、彼自身もまったく上の空の風情で自分のベストを引っ張った。同じくサッシャもまた落ち着かないふうにして、その真似をした。それから、私のお隣に坐っていたハイジがドレッシング・コーナーで着てきた長いスカートを私に示しながら、<ねえ、見て見て！わたしのペチコート。花柄が付いているでしょ>と何気ないふうに言う。明らかに、私の関心を彼女の‘下半身’へと向けているのは確かであった。この時点で、そこにいたどの子もアニャの様子に否応もなく注目していたのは疑いようがない。子どもらはそれぞれに妙に落ち着かない。シモーヌは鼻の穴をほじくっていた。ジェマもまた指しゃぶりに耽っていた。この間、皆どの子も一応おとなしくハリエッタのお話を聞いていたわけだが…。誰も直接にはアニャに向って何をしてるのかとも問わないまま…。素知らぬ顔ながら、その場のどの子も妙に落ち着きの悪い、ある種とても緊張した雰囲気は漂っていた。ちょうど3歳になろうとしていた幼いアニャだが、一方他の子どもらは彼女より年齢は上である。だが、アニャの自慰的行為が引き金となり、どの子もそれぞれに自慰空想に浸るさまが垣間見られた。その感染力は凄まじい！

シモーヌと一緒に、ジェマは滑り台に上る。そして滑り降りる。これを何度も繰り返す。と同時に、なぜか2人で‘救急車’のピーポーのサイレンの真似をし、喧しくがなり立てている。その大騒ぎに、2人はいとも愉快げに興奮している。

[なぜ彼女らが‘救急車’を呼ばなくてはいけなかったのかは謎。お尻の(性的)興奮がヤバイというわけだったかな？！救急車は(消防車でも同じだが)、良き象徴としての「父親ペニス」である。かくして取り敢えず彼女らの「自慰空想」には「母胎」にもたらされる‘惨禍’を未然に塞ぐ‘安全弁’がありそうだ！それも些か滑稽味を帯び、揶揄されていなくもないが…。いずれにしても、「母胎」にも「父親ペニス」にも憧れと羨望のどちらもがあらう。それ故に「躁的防衛」が顕著となる。]

・1976/05/14・・・女の子たち、シモーヌ、ジェマ、ハイジ、それにアニャが‘レディ’の装いをこらして、一緒に行進してゆく。どの子も得意げな趣きである。[‘小さな女の子’よりもママのような‘レディ’がやはり憧れなのは確か。それも当分は無理、だから待てないと焦れる思いにかなり辛いものがあるかな？]

この後しばらくしてから、私はたまたま男の子のニールとサッシャと一緒にウエンディ・ハウスにいたのだが、ジェマがそこへ入ってきて、なんら言葉を発することもなく、食器棚の上にあった小さなプラスチックの花を引っさらってゆく。そして急いで歩み去る。それから間もなくまた彼女は戻ってきて、お茶の道具、カップやら皿やらを腕いっぱい抱える。そこに例の他の女の子も押し入ってくる。それからウエンディ・ハウスのものを泥棒し始める。ニールとサッシャとは始め何が起きているやら事態を把握するのに手間取った。が、まずニールが気概を示した。かなり腹を立て、この事態の收拾に当たる。彼は女の子らを追い散らそうと試みた。サッシャも女の子らがいなくなってからウエンディ・ハウスの裏の扉を閉めた。そして彼女らがもう入って来れないことを確かめた。ところがそれからすぐに、ウエンディ・ハウスの中にいた私も含めて3人は外からの奇襲に遭う。彼女らが再びやってきて、ハウスの裏の扉から物を投げ込んだのだ。それらは実際彼女らが盗んでいった台所の道具やらドレッシング・アップするための衣装などで、明らか

にハウスの中を滅茶苦茶にしてやろうという魂胆である。彼女らはゲラゲラ笑い、勝ち誇って、気もふれんばかりに興奮している。ニールが再び彼女らを追い散らそうとする。

[おそらくこの狼藉の首謀者はジェマに違いないが、今ひとつ女の子らの意図が掴めない。……ただ、最初にジェマが盗んだところのプラスチックの花はおそらく象徴的には‘母親のおっぱい’、或いは‘母親のヴァギナ’のいずれでもあろう。些か侮蔑され、‘脱価値化 devaluation’されていそうだが……。そしてウエンディ・ハウスが‘母胎’を象徴するとしたならば、その内側にいるニールとサッシャは‘内なる子ども inner-child’となる。それならば女の子らの羨望 envy に満ちた攻撃性もこの場合よく解るというものだ。それに＜どうせ値打ちのないものならば、それがどんなに穢され汚されても全然惜しいこともない、ついでにこっちにも罪悪感は無し！＞といったのが彼女らなりの論法だろう！]

ミルク・サークルの時間、ジェマは飲み物をいただいたあと、席に戻ってきた。そしてわざと他の女の子の椅子に坐った。＜あら、間違えちゃったわ・・＞と言う。何やら悪戯っぽいニタニタ笑いをしている。[明らかに他の子が席を立ったあと、その隙にちょっと悪戯をしてやろうと思ったのに違いなかった。大人への反逆かな？日頃しっかり者の母親に頭を抑えつけられているらしいジェマの鬱憤晴らしのようでもある。既成の秩序やら決まりやらにちょっとふざける恰好で楯突いている。本気ではないと装いながら……]

・1976/05/21・・ジェマ、そしてシモーヌ(7ヶ月年下)、それにハイジ(10ヶ月年下)の3人が手提げ袋の所有権を巡って争っている。それぞれ頑固で、断じて譲ろうとしない。どうやらそれはどの女の子にとっても重大事のように、大真面目だ。一番幼いハイジなどは負けそうなものだから、つい涙にくれてしまう。それで、この悶着にどう收拾が付いたのやら、私は知らない。直に彼女らが再び仲良しをしているのを見た。[手提げ袋とは「母親の胎内 inside」を象徴している。そうだとしたら、その所有を巡って、どの子ども真剣にならざるを得ないということかな？それももはや‘内なる子ども inner-child’になりたい願望の執着というよりも、実際の母親に同一視して、いつか自分も‘女性性’を誇示せんとしているとしたら、これも彼女らの成長の証しであろう。つまり己れの‘孕む性’を無意識的に自覚しているという意味で……。それも、憧れが侮蔑に勝っているという意味で、ここに彼女らの健全さが窺われる。]

・1976/05/28・・ジェマはなにやら秘密っぽいニタニタ笑いで私に近づいた。そして無言のまま、私に挑発的な態度で攻撃を仕掛ける。他の何人かの女の子がこの機会を逃さず、彼女に加わり、私に猛攻撃してくる。どうやら私を‘囚人’として捕らえるということであった。そこにシモーヌがやってきて、何ら言葉を発することもなしに、彼女らを蹴散らし始めた。私をギャング化した彼女らから解放しようとしてくれたというわけである。多勢に無勢であったのだが、彼女は孤軍奮闘する。それも決然とした面持ちであった。[このシモーヌの気概には感動した。おそらくジェマに比べれば、彼女はまだまだ自分が「母親に味方してあげなきゃ・・」といった気持ちが強いんだろう。確かにシモーヌの母親の方がやさしげだし、おそらく傷つきやすい vulnerable ということはあるだろう。ジェマの場合は、そうした配慮は無用だろうから、こころ辺りの「母親転移」が実に皆それぞれで、興味深い。]

・1976/07/19・・・夏季休暇になる前のプレイグループの最後の日であり、ハリエッタはこの日をもってブレイリーダーを引退することになっていたので、自宅でパーティを催した。ジェマとシモーヌ、それに他に幾人かの子どもらもプレイグループを去ることになっていた。ジェマは可愛いパーティ・ドレスに身を包んで現れた。もったいぶった風でいかにも得意げである。意気揚々としている。彼女は、短めのスカートの裾を両手で持ち上げて、自己陶醉したふうに、くるくると回り始めた。ところがその最中、ふとそうした彼女を見ている私の視線に気づいた。そしてちょっとごちなくごまかし笑いをクスクスとした。彼女が何を気にしたかと思い、そこで「あらあら、お尻 bottom が見えちゃったわね」と、ふと私が口にした。図星だったらしく、ジェマは顔を真っ赤にする。そして早速それを近くにいたシモーヌに告げ口した。私が彼女に対して大変不躰なことを言ったということわけだ。「けしからん naughty・・・！」と、シモーヌは私をキッと睨む。そこで2人がかりで私を標的にして、懲らしめんと追掛けてきた。ギャング化したとも言えるが、どちらも自分たちに正当な理由があることで戦意を高揚させていた。私は早々に退散した。[‘母親’を擁護し、その味方になるのもいいが、やはり友達に味方するのがより大事になってくる時期でもあろう。そうして、そろそろ彼女らは「潜在期 latency」を迎えてゆく。]

ジェマとシモーヌが、赤ちゃんの乳母車の所有を巡って二人で猛烈な口論をしている。どちらも「わたしは欲しいんだから・・・」と譲らない。2人とも力量というか根性からしてまったく互角である。それでどう落とし前を付けたのか、私の知らぬうちに、直に2人がまた仲良しになっているのを認めた。どうやら大人の介入なしに彼女らの間で決着を付けたもようである。この場合、乳母車は勿論、「母胎」を象徴している。それはまた、彼女らの‘孕む性’への励ましともなるものだ。そろそろ「潜在期 latency」を迎え、学業に専念するうちに、彼女らも当分の間乳母車などすっかり忘れて、頓着しないであろうが・・・。

・1976/12/16・・・5ヵ月後、久し振りにジェマがプレイグループに立ち寄った。ウエンディ・ハウスにいる。私には挨拶しない。ウエンディ・ハウスへ私が踏み入れようとすると、「出て行け You get out！」と命令口調で指図する。それから、今度は場所を変えて、積み木のお家をつくり、ウエンディ・ハウスの台所のものをありったけすべてそこへ運び込む。以前の仲良しだったサイモン、それにエスタ、イアンなど幼い子らも加わっている。ジェマが‘Big Mummy’である。貫禄充分といえよう。一番幼いジョシユアは赤ちゃんの役を与えられるものの、どうしたらいいかよく分からないみたいだ。さらには彼はサイモンとお薬缶を巡って奪い合いになり泣き出す始末。そんなてんやわんやにジェマはあまり頓着しない。超然として自分はパーティ・ハットを被って納まっている。ホステス役のレディ然としてその場に君臨しているつもりらしい。あまり他の子どもらの世話らしきことは大してしようとしていないのだが・・・。私が彼女に「そのお家には幾つお部屋があるの？」と訊くと、「83よ」と堂々と応答する。「どのぐらいの人が住んでいるの？」と訊くと、「200人・・・」と悪びれず言い返す。ちょっと偉ぶっている。彼女は誇り高い‘Big Mummy’というわけである。だが、どうもそこには心からの喜悦がない。ただ虚勢を張っているといった印象が惜まれる。「「かくありたいという願望」と「それと実際とは違う」という事実の認識が出来てきているのは確か。だからこそ、その空想と現実とのギャップがどうも彼女を幻滅させ、苦々しい思いをさせているらしい。久し振りにプレイグループに舞い戻り、お遊びは卒業したというほどには「距離」

が出来ていたともいえないが、まずまずそろそろそんな気配でもある。空想しながらも、現実意識が、  
<こんなのバカみたい！>って、内心うんざりしているみたいだ。それだっていつしか振り返りもしなくなるの  
だろう。そして、むしろ学校では嬉々として学業に勤しんでゆくことになる。しかしながら、彼女の  
子ども時代は、なぜかしらどうも‘不完全燃焼’に思えてならない。侮蔑 contempt は両刃の剣である。  
相手を刺した矛先が自分に向かって自分を刺すだろう。だから、「見せたい・見られたいわたし」が宙ぶ  
らりんとなって、誰彼の注目から逸れてゆく。そして勿論、それが学業成績にも繋がってゆくとしたら、  
惜しいわけで。。]

\*\*\*\*\*

#### 【補記】

ジエマという女の子は、ほんとは内心では他の子にも負けず、赤ん坊になって母親に甘えたい気分は  
充分あるのだろうが。どちらかという、自意識が高く、優位な立場を取ること、自分の力を行使する  
のが好きらしい。大人には負けると分かっているから、敢えて対決 confrontation を避ける。おそらくテ  
キパキした母親には万事かなわないと内心思っているのかも知れない。そこに些かの悔しさもあろうし。  
勿論、同時に憧れもあるんだろうし。そこらに彼女のどうにも厄介な‘秘密っぽさ’が読める。日常的な  
母親との交流が具体的には今ひとつよく分からないが、そこで勝てそうにない相手(母親もしくは大人  
全般)に密かに‘侮蔑のまなざし’を注ぐということになりかねない。自慰空想 masturbatory phantasy  
が水面下で尚も猛威をふるっている心的現実が危ぶまれる。外見ほどには中身がうまく整理整頓さ  
れていない印象が拭えない。

彼女のお家には大型犬がいる。確かラブラドルリトリバーという種類だったが。私が地下鉄の駅から  
プレイグループへと向う道の途中で、ジエマの母親の運転する車が通りすぎ、同乗させてもらったこ  
とがあった。私は助手席に座り、後部座席にはジエマとその大型犬とがいた。私には恥ずかしそうにし  
て無言だが、結構大型犬には強気で従えさせているふうであったのが実に興味深かった。「私がボス  
(boss)よ！」をやっているわけで。日頃プレイグループであまり密なる交流のないジエマに対してくなる  
ほど！>と見直す気分になった。幼いながらも自然に備わった、ジエマのどことなく漂う覇気に改めて  
ガッテンしたのだった。

ただ、大型犬との日常的なじゃれ合い・馴れ合いとも関係してるのだろうが、彼女の中の‘男の子の  
部分 boy part of herself’の攻撃性がその‘下半身’に投影され、なにやら不穏な‘危険’なものを臭  
わせるのが気掛かりだ。‘私のすてきなお尻 bottom’を見せたいやら隠しておきたいやら、その気持ち  
にまだ決着は当分付かないようなのだ。その‘下半身’に否応もなしに付着された羨望と侮蔑の入り  
混じった‘攻撃性’がいずれどう払拭されるか、彼女のなかの‘やさしい soft’な部分との統合が待たれ  
よう。そして、いつか「見せたくない、見られたくないわたし」ではなくて、「見られていい、見せていい、  
そして見せたいわたし」というものに彼女が真底安心できるようになるといい。(2013/11/11 記)

\*\*\*\*\*